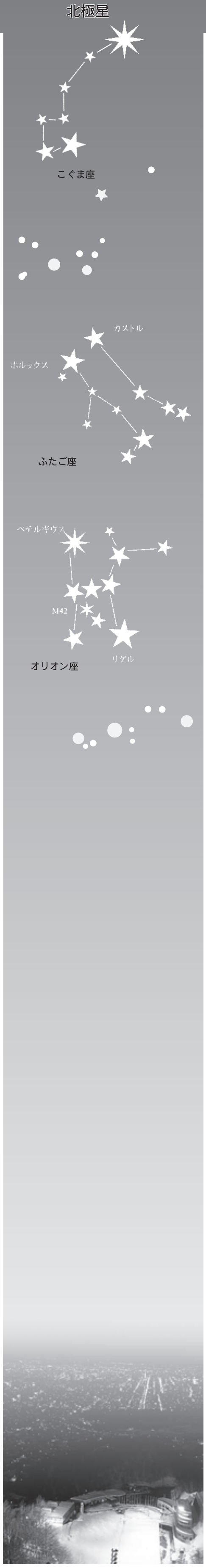
医師会長エッセイ

ポラリスを仰ぐ北の大地から



肩書の見られ方

紋別医師会 会長　武田（たけだ）　彰久（あきひさ）

紋別市は人口２万人程度の小さな港町です。カニやホタテなど豊富な海の幸に恵まれ、これらの加工品が人気となり、ふるさと納税額が毎年全国１～２位となっています。しかしこの辺境の人口減少は歯止めが利かず、企業誘致や観光産業の推進を図るもその効果は見えません。

そのような町で小さな診療所を営む自分が､昨年より紋別医師会長を拝命しました。地域の医師会長であってもその業務がこんなに多岐にわたり、またそれらの業務を遅滞なくこなすことは大変なことと痛感しています。一方で医師会長になった途端に周囲からの視線が今までと違うことも感じました。

以前コロナに感染して診療所を休診にした時には「なんだ？先生でも風邪ひくのか？」と、患者さんからよく冷たくあしらわれたものですが、会議に参加するため診療所を休診にすると（最近はZOOM会議で助かります)、「学会でしたか？忙しいでしょう？」と優しく声をかけてくれる人が現れました。また、以前はコンビニでカップ麺とコーラを買っていると「なんだ？先生！栄養が偏っているな！」と店内にいた患者さんから栄養指導を受けたりしていましたが、医師会長就任後はコンビニでいつものカップ麺とコーラを買っていると「なんだ？先生の奥さん病気ですか？」と妻のことまで心配してくれるようになりました。

娯楽施設が少ない地域では、ふとした環境変化に自分の想像を付け足して様々な憶測を事実とすり合わせようとする傾向があります。これが辺境の地における娯楽の一つなのでしょう。しかし､当時の私は､恐々として拝命した医師会長という肩書が、人の接し方まで変えてしまうのかと驚いてしまいました。

今後、先代の名を汚さぬよう医師会長としての仕事はしっかり務め、地元民の娯楽のネタにならないように努力する所存です。

十勝石が最古の国宝になった！？

遠軽医師会 会長　田中（たなか）　実（みのる）

昨年６月、町内白滝の赤石山から出土した黒曜石を材料とした後期旧石器時代の石器類(槍に取り付ける細石刃など)1,965点が、多様な加工技術の変遷が確認できる史料として国宝指定を受けました。黒曜石はマグマが固まった火山岩で貝殻状に割れることから天然ガラスともいわれ、北海道では白滝、上士幌町、置戸町、赤井川村が四大原産地となっています。

町出身の故遠間栄治氏(1904 ～ 69年)は不純物がほとんどない白滝産の黒曜石製石器に着目し、早くから収集を始め、その後旭川・紋別自動車道工事に先立ち1995年から2008年に本格的な発掘作業が行われました。出土した埋蔵文化財は白滝にある遠軽町埋蔵文化財センターに保管され、その一角では遠間氏が私財で建設した「郷土資料室」で保管されていた収集品を素朴なガラスケースとともに遠間コレクションとして展示しています。

子供の頃は「十勝石細工」という加工した石の置物が身近にあったこともあって「とかちいし」と呼んでいました。町内近辺の川原に角がとれた丸い石として点在し、石蹴りなどの石遊びにも使っていましたが、割れ方によっては手を怪我することもあったので「黒光りする危険な石」という認識だけで、黒曜石という名称はもとより石器として使われていたことなど知らずにいました。

黒曜石そのものが国宝になった訳ではないのですが、先見性や判断力を高めてくれるとか厄除けや魔除けのお守りになるなど「パワーストーン」という一面もあり、埋蔵文化財センターでは石器類の見学のみならず黒曜石を使った石器やアクセサリー造りもできるので興味のある方は是非立ち寄ってみてください。自宅には半分に割った黒曜石と残り半分を加工したペンダントがあります。親から譲り受けたもので処分に困っていたのですが、今後は国宝級のパワーストーンであると信じて大切に保存することにしました。